

IPU

27



時代と響く賢者への道

法人化元年、 谷口誠学長を迎え、 新たな歩み。

1998年の開学から8年目を迎えた今年、本学は公立大学法人に移行しました。また、教育・研究の両面にわたって草創期の基盤づくりに貢献した西澤潤一前学長(現・首都大学東京学長の後任に、国連大使やOECD事務次長などを務めた谷口誠学長が就任。さまざまな国際舞台でのキャリアや卓越したリーダーシップを活かしながら、キャンパスに新しい風を吹かしています。

「地域に根ざす大学に学んで専門性を磨き、大いに個性を伸ばしてほしい」と思いますが、また大学は、国際的にも通用する豊かな人間性や思考力、行動力を育む場でもあります。グローバル化時代の国際競争にも通用する幅広い資質を身に付けることで、未来は大きく開けます」

と、学生にエールを贈る谷口学長。多くの学生と価値ある時間を共有することに意欲的で、今年度前期は全学共通科目「グローバルゼーションと世界経済の将来」を担当。外交や国際経済のエキスパートとしての知見を活かした講義が好評でした。なお後期は、総合政策学部の専門科目「国際関係論」を担当します。

谷口 誠 [たにくち まこと]

1930年、大阪府生まれ。一橋大学大学院修士課程を修了後、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジ卒。外務省に入省して国連局経済課長、ハブア・ニューギニア大使などを歴任。国連の日本政府代表部特命全權大使、OECD(経済協力開発機構)事務次長の要職にも就く。その後、早稲田大学アジア太平洋研究センター教授、同現代中国総合研究所長などを経て本学学長に。

ニュース・リリース

受講希望受付中!

平成17年度 岩手県立大学公開講座

- いずれも無料。どなたでも受講できます。
- 講義時間/いずれも13:30~15:30
- 開催場所/岩手県立大学 共通講義棟



9月3日の特別講座(谷口学長)

キャンパス講座

多彩な教授陣が、さまざまな知的関心に応えます。

- B-4 10月22日(土)
顔の認知心理学 一笑顔の起源と機能—
社会福祉学部 助教授 桐田 隆博
- B-5 10月22日(土)
男女雇用機会均等法以降の
職場における女性の位置
—就労環境の変化と男女間格差の「拡大」—
宮古短期大学部 教授 植田 真弘

- B-6 11月12日(土)
子どもと家族をまもり育てるために
—子どもと権利のかかわり—
看護学部 助教授 金野 マサ子
- B-7 12月3日(土)
明治三陸大津波が遺したもの
看護学部 助教授 細越 幸子
- B-8 12月3日(土)
ユニバーサルデザインを理解する
—ユニバーサルデザインは本当にユニバーサルか?—
社会福祉学部 教授 狩野 徹
- B-9 12月17日(土)
デジタル写真の保存のしくみ
—もっと小さく、より効率的に—
ソフトウェア情報学部 助教授 亀田 昌志

大学院特別講座

- C-5 10月22日(土)
原油価格上昇と日本経済
総合政策研究科 教授 遠藤 昌雄

- C-6 11月12日(土)
宮澤賢治の温泉めぐり—花巻の温泉と宮澤賢治—
社会福祉学部 教授 佐々木 民夫
- C-2 11月19日(土) [9月10日から日程変更]
本当の思いやりはあるのか?
社会福祉学研究所 教授 菊池 章夫
- C-7 12月3日(土)
石油依存社会からの脱却
—風力など再生可能エネルギーの広まりについて—
総合政策研究科 教授 木場 隆夫
- C-8 12月17日(土)
次世代Webへの展望と課題
ソフトウェア情報学研究所 講師 児玉 英一郎

- 申し込み方法
※ハガキ・FAXまたは電子メールで。氏名・年齢・性別・住所・電話番号・受講希望講座(番号)・これまでの受講の有無を、お知らせください。
※本学のホームページでも受講希望を承ります。
<http://www.iwate-pu.ac.jp/>
※お申し込みは、各講座の5日前まで。同一日に複数講座を開催する場合は、1講座を御選択ください。
※5講座以上を受講した方に修了証書を授与します。
- 申し込み・問い合わせ先
岩手県立大学 研究・地域連携室
TEL:019-694-3330 FAX:019-694-3331
電子メール:kouza-05@ml.iwate-pu.ac.jp

キャンパス・ダイアリー

10月	29日	県大・盛短後援会理事会
	29~30日	大学祭IPU Festa2005 宮古短大部蒼翔祭
	28~11月4日	宮古短大推薦入学等願書受付
11月	1~7日	四大推薦入学等出願受付 盛岡短大部推薦入学出願受付
	5~6日	第12回ヒ素シンポジウム
	16日	宮古短大推薦入学等学力検査
	25日	宮古短大推薦入学等合格発表
	26日	四大推薦入学等学力検査 盛岡短大部推薦入学学力検査
12月	1日	盛岡短大部推薦入学合格発表
	5日	四大推薦入学等合格発表
	25~27日 25~1月7日	ウインターセッション 冬季休業

あなたの声を

IPUニュースの紙面づくりに御参加ください。記事に関する感想や意見、さらに投稿、本学への質問など内容も形式も問いません。FAXまたは電子メールで随時受け付けます。

キャンパス彩

ヤマボウシ [山帽子]



深まる秋とともに色づき始めた、まん丸の実。ほお張ると、桑の実を思わせる甘さです。それを鳥たちも好んで食べるとか。東アジアの山野に自生し、夏には白い花を咲かせるヤマボウシ。テニスコートから北に向かい、「思惟の小径」へ。散歩がてら、ほのぼのとした風情を愉しめます。

リエゾン Liaison

日暮れの早まりにあわせ、県大モールの木々も色合いを変え、葉を落とし始めています。本学は4月から公立大学法人になり、「環境、ひと、情報」に係わる地域社会のニーズに応えるため、地域発展に繋がる全学的な研究プロジェクトを開始しました。IPUニュースも今号(27号)から模様替えを行い、地域貢献に関する情報や理事長・学長等の役員による大学運営に関する話題、外部有識者等による寄稿などを盛り込み、地域社会と繋がりのある開かれた大学像を紹介していきます。今、キャンパスは夏季休業から戻ってきた学生達で賑わいを取り戻しています。(佐藤)

IPU27

発行/2005年11月1日

公立大学法人 岩手県立大学 研究・地域連携室
〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52
TEL:019-694-2000 FAX:019-694-2001
URL:<http://www.iwate-pu.ac.jp/>
info@ml.iwate-pu.ac.jp

大学づくり新事情

中期計画に示された教育・研究

今年度から公立大学法人へ移行したとにより、予算・人事・組織運営など大学経営全般の自主性・自律性が飛躍的に高まりました。知事からは、向こう6年間にわたる「中期目標」が示されており、本学では、この目標を達成するための「中期計画」を策定し、実学・実践を中核とした教育と研究を通して地域に貢献していく道を歩み始めています。

平成15年に公表された「岩手県立大学アクションプラン」の基本線を踏襲し「研究重視型」か「教育専念型」か、という二者択一の路線ではない、新たな第3の道を指向しています。すなわち実践課題を中心に据える「教育研究融合型」が本学を特徴づけるための基本姿勢です。まず、教養教育と専門教育の融合を図ります。そして地域社会や世界規模で生起する実践課題に視線を注ぎ、問題発見型・問題解決型の多様な教育を推進します。

専門教育の成果を高める方策

- **看護学部**
看護学の深化と、生涯学習に対応できる基礎能力を培う。
- **総合政策学部**
大学卒業時の到達目標を見据えたカリキュラムに基づいて、看護実践能力を確かなものに。
- **総合政策学部**
研究テーマを探究していく能力を育成。自立的に考えて行動できる看護職者の養成を図っていく。
- **社会福祉学部**
重点的な教育目標は「地域住民の福祉ニーズに応えるコミュニケーション・パートナー」

「の育成」。地域の福祉課題とニーズを主体的に発見し、実践的な解決を図れる専門知識と能力を持つ人材を育てる。

● **福祉現場の多様な職種と連携できる専門知識・能力・スキルの習得を**、さらに推し進める。

ソフトウェア情報学部

- **利用者の立場でソフトウェアの設計・開発**を行える、深い知性と豊かな感性を備えた人材を育成。
- **世界に通用する独創的なソフトウェアを設計・開発**できる人材、ならびに大規模なソフトウェアを設計・開発・管理できる人材を育成。
- **講義で得た知識を活かして現実の諸課題に実践的に取り組む**ため、実習科目を重点的に実施。
- **「社会調査士」「ピオトップ管理士」の資格**が取得できるようカリキュラムを改訂、指導に努める。



名誉学長の称号を授与

西澤潤一・前学長の功績を讃える



8月2日、この3月末に退任した西澤潤一・前学長に「岩手県立大学名誉学長」の称号を授与されました。

現在、首都大学東京の学長を務める西澤氏は、本学の開学に向けて構想づくりや理念策定などに尽力しました。さらに

- 初代学長として7年間に渡り教育・研究の充実に取り組む、本学の基盤固めへの貢献を重めました。
- また当日は、次の各氏に名誉教授の称号を授与。教育と学術の分野で残した功績を称えています。
- ※「」内は在職した学部名です。
- 門脇 豊子 【看護学部】
 - 米地 文夫 【総合政策学部】
 - 細谷 昂 【総合政策学部】
 - 首藤 伸夫 【総合政策学部】
 - 小松 啓 【総合政策学部】
 - 増子 義孝 【総合政策学部】
 - 土井 時久 【総合政策学部】
 - 地主 豊 【総合政策学部】
 - 齋藤 憲 【盛岡短期大学部】

淡江大学(台湾)の一行が来学

国際的な学術交流への足がかり

台湾で最大規模の私学として知られる淡江(Tamkang)大学からの使節団がキャンパスを見学するとともに、ソフトウェア情報学部との学術交流の可能性を調査しました。

来学したのは、副学長職に相当するChao Kang Feng氏ほか6名です。8月12日、沼田俊昭副学長を訪ねて本学の概要について説明を受けた後、ソフトウェア情報学部の教育・研究体制を見学しました。また本学が独自に行っている地域連携の取り組みに関する説明に、興味深く聞き入っていました。今回の訪問を契機に相互理解が深まり、グローバルな研究プロジェクトなどが始動するよう、双方で期待が高まっています。



オープニングは仮装パレード

大盛り上がり予感、IPUフェスタ



10月最後のウィークエンド、10月29・30日に大学祭が開催されます。今年のオープニングは、大盛り上がり予感、IPUフェスタ

テーマは「！」。趣向を凝らした企画の数々、そして発見と感動に御期待あれ、というメッセージをビックリマークに込めました。所見志(ところ、たかし)ソフトウェア情報学部2年 委員長ほか実行委員会のメンバーは夏場から準備を重ね、本番に臨みます。

午前9時半、滝沢駅から特設ステージをめざす仮装行列がオープニングのパフォーマンス(写真は昨年の記録)。学部やサークルの企画、フリーマーケット、岩手大学と共催の模擬店、郷土芸能団体の出演、アーティストライブなど多彩なプログラムが組まれます。地域に根ざすイベントとして、1万人を超える来場者が予想されます。

教える人・学ぶ人の一生懸命

「組み込みソフトものづくり塾」を開講

ソフトウェア情報学部は学部生・大学院生、社会人などを対象に「組み込みソフトものづくり塾」を開講しました。

時期は、8月1日から9月22日までの土日祝日を除く毎日。延べ32日、191時間に及ぶ密度の濃い内容です。基本コース・プロセッサコースという4部構成。実習を中心にして基本技術を体得することに主眼が置かれました。

組み込みソフトはマイクログプロセッサに搭載され、カーナビ・携帯電話・デジタルカメラ・産業ロボットなどの機能を制御するソフトを指します。これらは、日本の製造業を支える基幹的な要素の一つ。しかもハードウェアともソフトウェアとも密接に関連し、産業界では、この分野のスペシャリスト育成が急務の課題

です。したがって今回の開講は、地域における「ものづくり」の基盤強化への貢献と位置づけられます。

「思いは、学内のさらなる活性化に向けられます。各部門に働きかけたり連絡調整に努めたり、というふうには陰ながら現場の役に立ちたいですね」

と、グループリーダーを務める小友善衛さん。さらに県や評価機関との折衝、経営動向の把握などで多忙な日々が続きますが、立花紅さんと息の合った仕事ぶりを見せています。



IPU人気は、なお続く

およそ2000人が参加して
平成17年度・大学説明会

さわやかに梅雨の晴れ間が見えた7月3日、大学説明会が開催されました。岩手県内をはじめ東北各地の高校から受験を控えた高校生が集い、最終的な参加者は延べ1916人(推計値)。事前の申し込み数を上回る賑わいぶり、本学に寄せる関心の高さが裏づけられた一日でした。

谷口学長が参加者に向けてメッセージを贈ったほか、高校教員向けの説明会、アドミッション・オフィス入試相談、学部ごとの説明会など、さまざまな関心に応えるプログラムが組まれました。

4学部と盛岡短期大学部に加え、宮古短期大学部が出張形式で経営情報学部の魅力をアピール。また模擬講義をはじめ入試制度の説明、学部棟ツアー、現役学生による大学生活のカイダンスなども関心と呼び、説明を熱心に聞き入る表情が印象的でした。



学生有志が学部棟ツアーを企画



看護学部の学部紹介



東北各地から参加者がキャンパスへ



学びの楽しさを説く(総合政策学部)

アットホームな学風です

宮古短期大学の行事あれこれ

経営情報学科を擁する宮古短期大学部は、学生一人一人を教育活動の主役位置づけることに、さまざまな地域貢献活動を展開しています。

- **オリエンテーションキャンプ(4月)**
新しい環境に早く慣れてもらうと、新入生を対象に1泊2日で開催。学業や生活面のアドバイスを送るほか、先輩や教員と交流する場面も見られます。
- **スポーツ祭(6月)**
ゼミ対抗でソフトボールやテニスを楽しんだ後は、打ち上げパーティー。
- **キャンパス見学会(7月)**
受験希望の高校生、保護者の方々に「みやたん」の魅力アピール。現役学生による貴重な話も聞けます。
- **みやこ秋まつり**
学生・教職員の有志が参加して華を添え、地域の皆さんと交流します。



【10月】

職場訪問

次代を創るスタンスで

● **経営企画室**

法人化に伴って事務局に新設されたセクションです。全学的な視点で教育・研究・組織運営の連携を担当。柔軟かつスピーディーに実効性に富む取り組みを広げようと、学部や本部、経営陣との間で情報や意識の共有に努めています。

「思いは、学内のさらなる活性化に向けられます。各部門に働きかけたり連絡調整に努めたり、というふうには陰ながら現場の役に立ちたいですね」

と、グループリーダーを務める小友善衛さん。さらに県や評価機関との折衝、経営動向の把握などで多忙な日々が続きますが、立花紅さんと息の合った仕事ぶりを見せています。



ビジョンの共有から開ける未来

岩手県立大学の法人化

Ⅱ再出発に寄せて

理事長
市川 喜紀



この4月、本学は独立行政法人法に基づいて「公立大学法人」として再出発しました。

地方自治体は地方分権化によって高い透明性、責任の所在の明確化、そして効率的な行政サービスを提供を求められるという、時代の趨勢を反映した法人化です。

冒頭に挙げた独立行政法人法の基本理念は「公共性」「透明性」「自主性」の3点に集約されます。すなわち、公立大学法人への移行を通して大学それ自体の自主性・自律性を高めることが狙いとされます。

法人経営における第1のポイントは、大学が立案し、第三者の評価を受けた中期目標・中期計画に沿った運営を行うという「自己責任の原則」です。すでに中期目標・中期計画のもとで単年度計画を策定、教育ならびに全体の運営を行っています。言い換えるなら教職員はそこに掲げられた計画の達成に関して責任を負っています。

第2のポイントは、使途制限のない運営費

の交付を前提に、発生主義、複式簿記など「企業会計的な経営手法」の導入が義務づけられている点です。しかも、これまで行われてきた会計監査に加え、公認会計士の監査・指導を受けることになっています。

第3のポイントは、さまざまな目標の達成状況や業績評価の結果などを積極的に「情報公開（ディスクロージャー）」していくこと。また次の段階では、法人としての実績や教職員の業務成果を反映した給与体系の構築、すな

わち業績給与制の導入が考えられます。これらの施策は、民間会社では極めて当たり前のことです。しかし計画達成が即、収益に反映される民間企業と異なり、大学経営の場合は教育の成果の測定だけでも5年、10年といった時間を要するのです。今回の法改正に際しては十二分に議論が尽くされたわけではなく、かつ、学内では法人化の準備も万全とは言えない段階での再出発となりました。したがって新たな業務体制での事務量が增大しており、こうした影響は教員にも及んでいます。

しかし、学長や部局長がリーダーシップを発揮することで予算の重点的な配分が可能となり、横断的な情報交換が促されたりするなど、少しずつではありますが法人化による効果も出はじめています。

西澤潤一前学長が打ち出した「実学実践」を旗印とする人間教育と実証研究、さらに地域への貢献という基本線を引き継ぎながら、いかにして本学の持ち味を発揮していくかが当面の大きな課題です。教職員一人一人の時代認識、自覚と行動、そして情報の共有、行動の連携が強く求められています。いわば「ビジョンを共有することこそが大学経営の基本であり、本学の確かな未来は、そこから開けると信じています。」

サークルで元気者



いい音、いい顔、いい仲間

ロックミュージックの好きな仲間が集まっています。バンドを組み、それぞれの楽器の音を合わせ、演奏に没頭していく…。よりイメージに近い音が出せると、喜びが広がるのだそうです。

伝説と化したグループの名曲や、今どき風のヒット曲をレパートリーに取り入れています。大学祭や月例の学内公演、さらにライブハウスに登場したり、盛岡劇場で定期演奏会を開いたり。ステージに立って熱く奏でるほど、メンバーの輝きは増すのです。

軽音楽部

留学生サロン



“政治の法”を学んでいます

公証人の仕事に就くことを視野に入れながら、日本における政策系の法律を勉強しています。自治体法務、市民社会の法体系、行政訴訟の判例研究などに関心が向いています。南米にあるパラグアイと日本の国情は違いますが、法の普遍的な考え方に触れられるのが探究心の原点です。

首都のアスンシオンから南に400km、ピラポという移住地から来ました。大豆や麦の農場を営む両親は花巻市出身で、二世の私にとっては初めての日本。スペイン語を通じて、いろんな人と親しくなれる点も嬉しいですね。

総合政策研究科・研修生

佐藤 澄枝さん ●パラグアイからの県費留学生

中国レポート

隣人との、より良い未来の構築を



大連交通大学を見学する谷口学長



留学予定者との記念撮影

大連交通大学との学生交流に向けて

谷口学長らの一行が7月25日、大連交通大学の軟件学院(情報システム系の学部)を訪れました。同大学と本学とは、国際交流協定を結んでいる関係です。学生交流の第二弾として、この10月から、5名の留学生がソフトウェア情報学部で学ぶことになっています。来日予定者と面談して意見を交換したり、本学のプロフィールを説明したりした谷口学長は「これからの中日友好に向け、若い世代の交流は極めて意義深いと考えます。ソフトウェア情報学部に限らず、そうした動きを広めたいものです。留学生の受け入れ先としてサポートに努めるとともに、岩手県立大学からも留学生を送り出したいと思っています」と、将来への抱負を述べました。またソフトウェア情報学部の伊藤憲三教授は、日本語で講義を行うこと、基礎教

河北省社会科学院とのリレーション深まる

さらに、国際交流協定締結校の一つ、河北省社会科学院でのスケジュールも組まれました。谷口学長に名誉教授の称号が授与されたいに込める形で、記念講演「東アジア共同体の成立に向けてー日本と中国はいかに協力すべきかー」が開催されています。このほか、河北省博物館で古代中国の歴史と遺跡を見学する場面もありました。懇親会の席で、河北省人民政府外事務室の幹部からは

やC言語の基礎を固めておくこと、講座配属は来日後に当人と相談して決めること、などを示しました。

翌26日には、谷口学長の講演会が開催されています。「中日友好ー東アジア共同体について」と題し、国際情勢の分析を踏まえ、軟件学院の学生250人に熱く語りかけました。



「名誉教授」の称号を授与して

「こちらの大学も岩手県立大学との交流を図ってほしい。学術面に加え、留学先としても関心を寄せています」というメッセージが寄せられました。こうした方、研究者の間では、岩手におけるグリーンツーリズムを調査したい、という声が上がっていました。

風を起こせ

1
地域連携の
ビジョンと未来系

キーワードは「環境、ひと、情報」。
多彩な知的資産を融合させ、
プロジェクトの成果を還元したい。



岩手県立大学地域連携研究センター

より緊密な、地域との関係づくりに向けて。

「知的資産のAPビルを」

大学の経営環境が激変、教育と研究の両面で熾烈な競争原理が働くようになりまし。こうした流れを、私は大きなチャンス到来だと捉えています。なぜならば、より個性的な大学像を打ち出し、地域における存在感を、これまで以上に発揮する機会が増えるからです。

本学には、どのようなスタッフが集って知的スラムを組んでいるのか。いわゆる知的資産を広く知ってもらうことで、オンリーワンの特色を御理解いただけたらと思います。さまざまな分野に及ぶ教員のプロフィール、専門領域・実績を一覧で「知的資産ガイド」という小冊子は、その一助です。また「研究者総覧」という形で、ホームページ上で教授陣を紹介しています。

時代を先取りする4学部・4研究科、そして盛岡と宮古にある短期大学部を担う人材がドメスティックかつグローバルな視点で数々の実践課題に取り組んでいます。学際的・複合的に各ジャンルの要素を組み合わせると、新たなプロジェクト展開が現実味を帯びていきます。

学内の目標共有を、どのように図るのか。

「現場主義でテーマを深化」

問われるのは問題意識、そして獨創性・創造力・構想力です。さまざまな社会分野が直面する実践的な課題に対し、どのような理論と解決方法を示せるか。その意識を先鋭化させ、諸研究の社会的な価値を確かなものにしなければなりません。地域のため、世界のために、学の立場から貢献を深めていく決意です。

産業界との連携と協働、いろいろな分野で活動する団体とのタイアップ、さらに政策的な事柄に関してはシンクタンク機能を活かして行政や市民に提言するなど、研究成果を還元していく方法は、いくつも考えられます。

したがって、学外との接点は多いほど望ましいのです。ベンチャー企業への支援を仰ぎたい、先端分野で共同研究を進めたい、知的財産の活用を図りたい、専門分野のスペシャリストの講演を依頼したい、などなど相談事や御用命は地域連携研究センターが窓口となって承り、学内資源のコーディネートを進めます。

「中期計画」に示された新しい動き

全学的に取り組む企画

●地域専門職高度化プロジェクト
遠隔教育で、時代にふさわしい高度な専門職の育成を図ります。看護職・福祉職・行政職などを対象に学習機会を提供するとともに、継続的なレベルアップに結びつけます。

●共創メディア研究プロジェクト
コミュニケーションFM局の開局を検討。地元企業とのタイアップを踏まえ、放送する番組・情報（コンテンツ）の制作技術を高めるとともに、メディアを普及させるための研究と実践を展開。

全学的に重点的に取り組む研究課題

●テラヘルツ応用研究プロジェクト
光と電波の中間的な性質を持つ特殊な電磁波「テラヘルツ」は照射される対象を壊すことなく検査や診断に用いられ、医療・福祉・生命科学・画像工学など多くの分野での活用が見込まれています。その研究開発を担う共同事業体を立ち上げ、IT・バイオテクノロジー・環境科学・モノづくりなどの産業集積を促します。

●少子高齢化プロジェクト
健康管理と生活支援を目的に、統合化された情報システムを構築。その活用を図り、地域での運用価値が高まるよう体制を整えます。

●環境研究プロジェクト
地方自治体の政策づくりに参画し、環境条例などを制定するサポートを行います。

IPUへ言いたい

岩手県立大学と 民間組織の 協働について

私 が所属するNPO法人未来図書館は（1）仕事を通じての子供と社会との接点作り（2）コミュニティ・ビジネスの支援、の2点を事業の柱として活動しています。

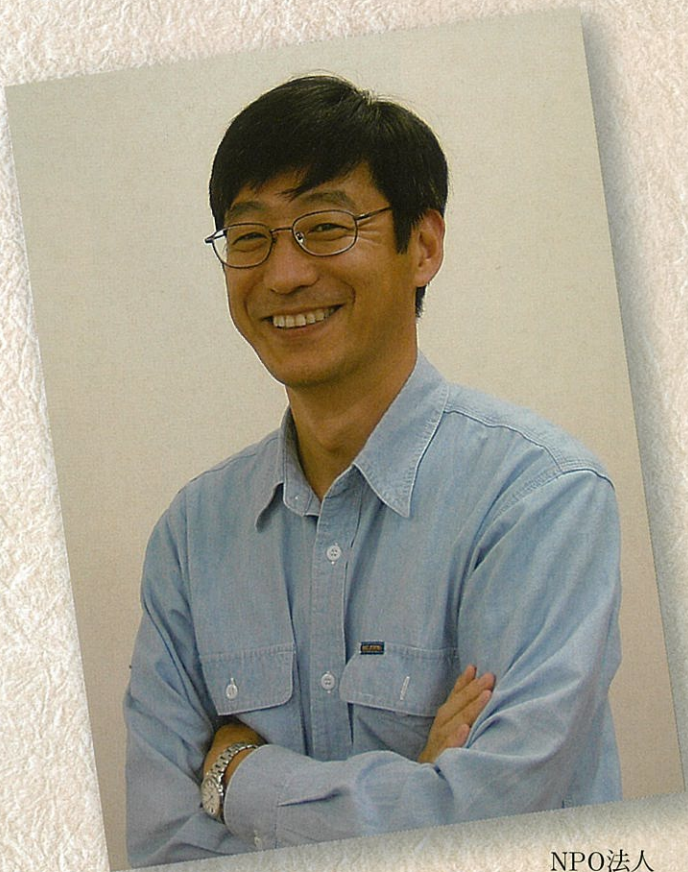
これまで岩手県立大学さん（以下IPU）とは合口学長さんをはじめ先生方や学生さんと様々な交流をさせていただいております。私はどちらかというところ積極的に出歩く方ではないのですが、それでもIPUと多くのつながりができているというところに改めてIPUの重要さを感じております。

そのIPUは本年4月から公立大学法人に移行されました。それに伴いアクションプランなるものが作成され、今後の大学運営は、そのプランに沿ってなされるようです。アクションプランは、いろいろな面から幅広く検討されており「よくできてるなあ」というのが正直な感想です。そこに書かれてあることが全て実現できたら素晴らしい大学になるでしょうし、地域へのさらなる貢献も実現するでしょう。しかしプランは、あくま

でも机上のこと。各ご担当者には、その実現に向けて頑張ってくださいと思います。

今回特に注目しているポイントとして、地域貢献推進組織の設置が挙げられます。これまでも岩手県地域連携研究センターという機関がありましたが、新しい組織が具体的にどう進化するか非常に楽しみです。

大学との協働により可能性が広がる民間組織



NPO法人
未来図書館 理事長

久保 均

1952年、一戸町奥中山に生まれる。盛岡第三高校を経てソフトウェア開発、会社経営など三携った後、2003年、いわてコミュニティビジネスセンターのコーディネーターに就く。翌年、NPO法人・未来図書館の設立に参加して理事長を務める。

これから大学も生き残りをかけて熾烈な競争を強いられると思います。直接の顧客である学生や企業にサービスを提供するためにあたって民間組織との協働は、IPUの付加価値を高めることに役立ちます。そういった意味からも様々な成果めざして、さらなる連携をお願い致します。

は、たくさんあります。そのうち企業やNPO法人との協働は進んでいると思います。しかし地域の活性化に取り組んでいる他の民間組織にとつて、IPUはまだまだ遠い存在ではないでしょうか。「シャイ（控えめ）」な民間組織が気軽に出入りできる場所になって欲しいと思います。話は変わりますが冒頭で述べたように未来図

初めて明確に意識するのが、この時期のようです。これでは軌道修正ができず、とりあえず手が届く選択肢から就職先を選ぶことになり。それを避ける為にも1年生、2年生のうちに仕事をしている社会人と多くの接点をもつことをお勧めします。どんどん大学の外にも出て下さい。

地域に開けた大きな窓を。
ひろい分野との、さらなる接点を。
そしてオンリーワンの大学像を。



秋晴れの午後、芝生の乾いた感触が心地よい。グラウンドの雰囲気を含めて野球というスポーツの、すべてが好きだと鹿糠さんは言い切る。試合の段取り、部員への連絡などスタッフとしての仕事も楽しく、硬式野球部のマネジャーを4年生の6月まで続けていた。



地域に生きる人々の意味を探ろう。

「私の農村社会学」

鹿糠 亜裕美 「総合政策学部 / 4年」

た。初めて見る景色の中、雪道をテクテク歩いて一軒一軒に顔を出す。農村生活の実態についてヒアリング調査を行ったのだ。

雪国の人の決意を聞いた。

家族構成農業に従事している人の数耕地面積、作物の種類、さらに所得水準や就業意識に関することなど項目は多岐に及ぶ。どのお宅にも、快く応じてもらったことに感謝は尽きない。お茶と漬物という、田舎風の款待も心温まるものだった。そして、とある大きな農家で、60代の御主人が漏らした言葉が忘れられないと振り返る鹿糠さん。「私たち夫婦は、農業を楽しんでやっていきたい。マチに生活と仕事の場を求めた息子夫婦に将来を託す考えは、今のところ、ありません。若い世代に多くを求めると、集団営農や新規就農者の定着を図るなど、波及効果のある別の方法を見つけれられると思うのです。しばらくは模索の時期が続くでしょうが、その先に明るい未来を感じていきます」

話に聞き入る鹿糠さんは、飾らない胸の内を受け止めようと必死だった。生業としての農業は厳しいが希望を持ち、この土地で生きていく…そんな決意表明に感じられた。

丹精こめて育て上げた野菜は漬物に、そして米は餅や菓子に加工して産直施設に出荷しているとのこと。さらに奥さんは、手作り納豆の名人と評判だ。小ぢんまりした集落のコミュニティに溶け込むライフスタイルを、自然体で実践する姿に共感と羨望を覚えた。

「私は、お金やモノでは絶対に量れない豊かさの存在を確信しました。人それぞれの思いは計量化できませんが、フィールドワークを重ねる際に私は、とても重視しています。なぜなら、その地域に生きるこ

の意味を探ったり、活性化の方策を考えたりする確かな手がかりになるからです。言うなれば生活者の価値観や意識を通して変容ぶりを捉えるのが、農村社会学を学ぶ私スタンスです」

大豆を活かす集落に行く。

いろいろな人と隠せず話せる点に、鹿糠さんの気さくな人柄が表れる。伝えたいことをハッキリ伝え、相手とのコミュニケーションを図る。さらにアドリブで訛り言葉が出るほどに、現場の空気に溶け込む感覚がある。

新たに着目した現場は、二市市の足沢(たさわ)地区。浄法寺との境が近い中山間地で、世帯数は60戸ほど。およそ200人が暮らしており、そもそもまた過疎という問題を抱える。卒業研究の素材を集めるため、農閑期を迎えた現地に何度か通つ計画だ。

協力を仰ぐのは、昭和60年代から活動してきた足沢大豆生産振興組合。地元で採れる大豆を原料に、味噌・しょうゆ・納豆などを製造して産直施設へ出荷している。グループを組む婦人パワーが、地域資源を活かしている好例である。「農」と「食」に関する社会活動を通じて住民の連帯と結束が強まってきた。一人一人の生きがいの創造という意味でも、計り知れない価値を見出せる。

ふつ々の暮らしを見つめたい。

「志を寄せた人たちには『何かしなくちゃ』という差し迫った気持ち芽生えたと察せられます。また『自分たちの郷は、どう在るべきなのか』と意見を交わし、協働と自立の道を求める機運も盛り上がったのでしょ」

こう話す鹿糠さんは、取り組み内容や経済効果などを把握した上で、オリジナルな視点を貫くつもりだ。家庭の外に働く場を求める気持ちに迫り、より踏み込んだ質問を発したいと意気込む。暮らしや行動の底流を成すメンタルな要素に力点を置きながら、年明けの論文提出に向けて忙しい日々が続く。

「身近に感じられる地域の日常に目を向けて社会構造を分析すると、私たちの国が抱える問題や進むべき道にも気づくかもしれません。自分なりの問題意識を大切に育てて筋道を立て、さらに理論的な着地点をイメージしながら一歩ずつ先へ進みます」

もしも農村とは別に研究対象を求めるなら、という質問に「それなら三陸の漁村に行きたい。海に生きる人の話が聞きたい」と、鹿糠さんは即答した。まなざしは温かく、口カルな社会に目を凝らして知見を引き出す。それもまた、総合政策学の一つの形なのだろう。

結びのQ&A

- Q 学ぶ喜びは?
- A 現場でいろいろな人に会えること
- Q 学問の課題は?
- A 受け身にならないこと
- Q 総合政策学とは?
- A 地域を知ること
- Q 若手への提言
- A 有形無形のさまざまな価値を育てよう
- Q 日本への提言
- A 農村を活かそう
- Q 世界への提言
- A 立場を超え、共生の道を探りませんか



ゼミの指導教員・佐藤利明教授の研究室は参考文献の宝庫でもある。

すべての始まりは「これって何なの?と聞いているの?」という素朴な疑問や好奇心。研究対象とテーマが決まったら、まずフィールド(現場)に足を運ぶ。そして、生きた情報を一つ一つ集めてみる。やがて、作り物ではない本物の姿が見えてくる。実証的に体感するリアリティーは、思考を広げる糧となる。

まだまだ春は遠い頃、「環境調査実習Ⅱ(3年次後期)で沢内村の面沢(りょうざわ)地区を訪れた鹿糠さんは、降り積もった雪に驚くばかりだった。しかし近年にない豪雪でも、除雪が行き届いているのに感じ



鈴木 あゆみさん
[社会福祉学部/平成16年3月卒]
盛岡地方振興局 保健福祉環境部

福祉の可能性を信じてゆこう。

●心を支える人が必要だ
大学で籍を置いたのは、福祉臨床学科の福祉心理コースです。専攻したのはメンタルヘルスと呼ばれる領域で、さまざまな悩みに直面する人、あるいは対人的な不安要素を抱える人に対するケアの手法を中心に学びました。養護施設ほか、現場での実習を通して社会的な支えが不可欠であると認識した私は、そのような分野の仕事に就きたいと願うようになりました。

●できる限りを、と思いつつ
県立病院のケースワーカーとして働くことも視野に入れ、福祉系の公務員という職業を志しました。今は、社会福祉主事として生活保護を担当しています。さまざまな事情で生活が困難な方に、経済的な援助を差し伸べる立

場です。一軒一軒の家庭を訪問するほか、関係機関と連携して個別の状況を把握した上で、扶助額の支給手続きが取られます。細かく定められた規程や法律が拠り所でも、情とのジレンマ抜きには語れない仕事です。

●自立へのアシストも務めたい
ある町の、およそ70世帯を担当しています。高齢化、雇用不安、母子家庭の増大など受給を巡る背景は多様かつ複雑で、まるで現代社会の縮図を見る思いです。私の立場上、できること、できないこと、この決定は客観的に下さねばなりません。ケースワークを通して自立を促したり、介護サービスなど社会資源の活用を勧めたりするのも大切な役割だと自覚しています。



井上 智美さん
[看護学部/平成16年3月卒]
盛岡友愛病院 看護師

気持ちに寄り添う看護が、いい。

●すべての勉強が糧になる
「我ながら、よく勉強したなあ」と、大学の日々が思い起こされます。適性や進路を見極める大切な時期でもありました。形態機能学・人間関係論ほか、ふだんの仕事に役立っている科目を多く挙げられます。また自分なりのテーマを掲げて臨む看護総合実習では、老年分野を選びました。回復期のリハビリや訪問看護の在り方を知り、地域医療に自覚めた私です。

●笑顔に、癒しの効用あり
整形外科、神経内科などに対応する混合病棟に勤めて2年目。夜勤にも慣れました。入院している患者さん一人一人の症状に合わせて手術前・手術後のケアに努めています。さらに

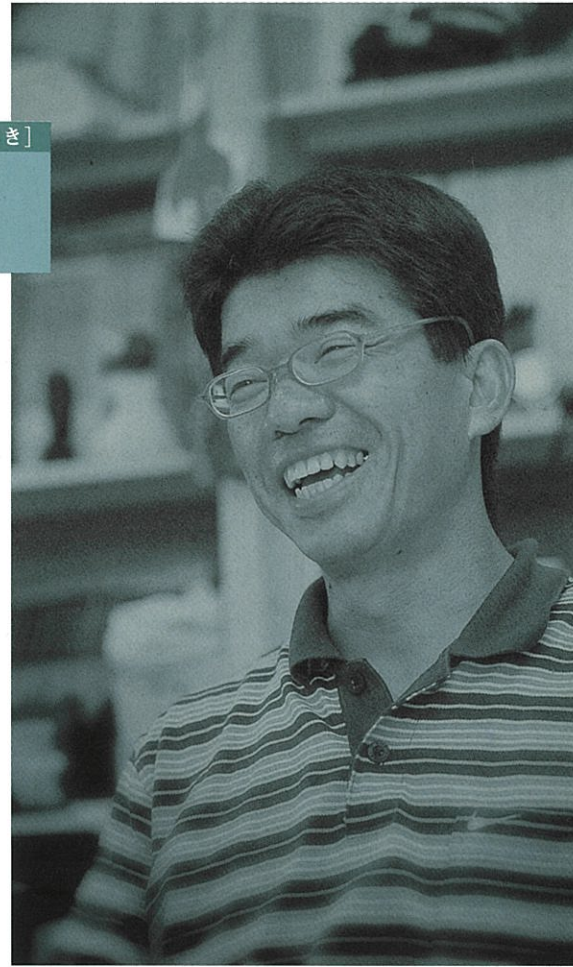
精神的な負担が和らぐよう、相手の気持ちに寄り添って言葉を掛ける…。そんな配慮が欠かせません。看護師の仕事には、技術論を超えた要素も多々あることを体験的に学んでいます。

●成長を促す研修メニュー
急性期・慢性期・回復期に対応する看護。あるいはリハビリテーションや介護など、福祉分野との連携が不可欠な看護。こう考えると専門職者として視野が広がり、さまざまな役割を自覚できます。だからこそ、向上心を持ち続けたいですね。院内の研修会では床ずれ予防、感染症対策、ガン患者へのケアなどをテーマに臨床現場での対応力を養っています。

教える私・究める私

音声言語処理は、どこまで進むか?

ソフトウェア情報学部 助教授 [いとう よしあき]



「ちょっとした成果を貪欲に求めよう。もつと上のレベルをめざそう」と、学生に研究の勧めを説く毎日。熱い呼び掛けにこたえるように、この8月末、京都大学で開かれた音声認識の講習会に3名が参加しました。

「テーマを見つけ、それを掘り下げていく喜びを知って欲しいと願うばかりです。ヒントを与えたり具体的な対象を示したりして、探究心に火を点けるのが私の役目です」

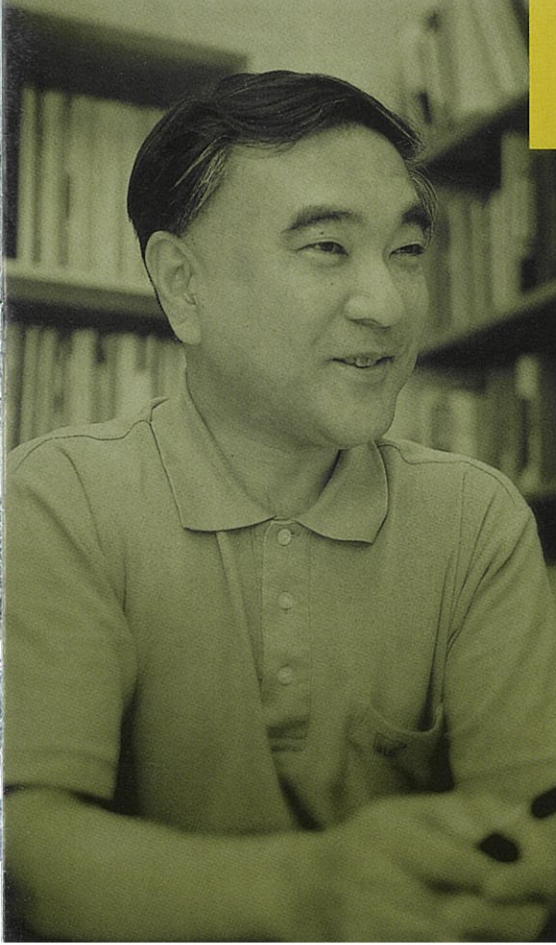
こう話す伊藤先生が取り組む領域の一つが、音声言語処理。マイク・パソコン・ハードディスク型録画装置を接続し、キーワードを吹き込んで特定の映像を検索する、というシステムの共同開発でスポーツを浴びました。日本語とは異なる言語、あるいは個人差のある発音やイントネーションへの対応をクリアすると、実用化への道が大きく開けます。

「オモシロいこと、人々の暮らしに役立つことに没頭したい」という理由で、製鉄会社などを経て研究者に転身した伊藤先生。海外の学会誌や専門書に論文を発表する機会が多いのは、グローバルな評価こそが研究者としての生命線だと信じているからです。

※1997年、東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻を修了。川崎製鉄、新情報処理開発機構を経て本学へ。工学博士(東京大学)。専門分野は音・動画像処理、情報検索、ヒューマンインタフェース。担当科目は「学の世界入門」「情報学基礎A」「知能メディア総論」ほか。電子情報通信学会・情報処理学会・人工知能学会に所属。

市民参加は、明日の社会の胎動だ。

総合政策学部 教授 [たかはし ひでゆき]



ライフワークとして取り組むテーマは「市民参加」。なかでも、自治体における市民参加による政策づくり、市民と事業者・行政の協働による環境保全(環境パートナーシップ)、市民による主体的な条例づくりなど、市民参加の「新しい胎動」を現場に根ざす視点で捉えるのが、高橋先生の研究姿勢です。

「全国を歩いて市民参加の先進事例を収集し、分析しています。岩手でも、市町村レベルで実質的な市民参加を実践したり、市民参加を定着させるための仕組み(市民参加条例や自治基本条例等)を模索する自治体が多く出てきました。環境パートナーシップへの取り組みも始まったところです。今後この流れをどう広げていくべきかについて、研究と実践を重ねています」

どこで、どのような取り組みが行われたか。具体的な事例を取り上げ、一連のプロセスや成果に言及しながら、学生に主体的な考察と議論を促すのが高橋先生の教授法です。また講義や研究に活用する素材を集める際は、自治体と住民の双方にコンタクトするなど、より多角的な情報収集に徹しています。

「市民参加といっても、地域を良くするために主体的・積極的に行動する市民がいなければなりません。こうした意欲ある市民をどのようにして増やしていくのか、そして意欲ある市民の提案を受け止める仕組みを行政がどのようにして整備していくかが問われています」

※明治大学大学院政治経済学研究所博士後期課程単位取得退学(財行政管理研究センター)を経て本学へ。政治学修士。市区町村における市民参加の制度化(環境パートナーシップ)の現状と課題。市民立法の実現手法などを研究。担当科目は「政策形成論」「市民参加論」「比較政策論」。岩手県総合計画審議会委員、岩手県環境審議会委員。